

オムニバスによる問題解決学総論の B クラスの第 4 回目として大森映子教授がご登壇。今回は、観光資源の活用と保護には資源として活用できない時期が生じるというジレンマをテーマに、問題解決策について解説される。講義のポイントをまとめてみよう。

<イントロダクション>

最近ニュースで取り上げられているように、富士山の世界遺産登録の可能性がカンボジアの会議で正式決定されたことをご存じかと思います。このニュースの影響もあり、ますます観光地としての富士山が着目されています。外国の人にとっても、世界遺産に登録される富士山ってどんなところだろうという思いも高まるでしょうし、観光客の増加も予想されています。

実は、観光資源の活用というのは、重要な経済活動で、国も本腰を入れて取り組みを始めています。たとえば、2006 年観光立国推進基本法も成立し、21 世紀における重要政策として位置づけ、観光産業の育成、環境整備の施策などの整備が進められています。

<観光資源のジレンマ>

さて、この観光資源を考えるに当たり、一つ日本の特徴を抑えておく必要があります。日本の観光資源の多くが木造建築であるという点です。木造文化財の宿命ですが、木造建築物を長く維持しようとするれば、当然、定期的な手入れが不可欠となります。ケースによりますが、そのメンテナンス期間は数日で終わるといったものばかりではなく、数ヶ月以上にわたることも少なくありません。

そうすると、その期間は、観光資源として活用できないこととなりますから、観光地としては、その時期、死活問題を抱えることとなります。修復期間中の観光をどうするかというのは、リアルかつ重要な問題です。

<姫路城の画期的な取り組み>

姫路城は、1993 年に世界遺産に登録されました。その姫路城ですが、天守閣の修復が必要になりました。その修復工事期間は 2009 年より 2014 年と 5 カ年にわたり、そのままでは、天守閣という重要な部分を公開できないという問題を抱えていました。

実際、観光客数をみるとその影響がわかります。2008 年度の 100 万人、2009 年度の 156 万人、そして、2010 年度には、46 万人と減少は避けられず、集客対策を取らねばならない状況になりました。

そこで取り入れられたのは「「天空の白鷺」計画」といわれる取り組みです。これは、修復のためにつくられた天守閣を囲む施設（足場や作業スペースを含む施設）を天空の白鷺と名づけ、これを観光資源にしようという試みでした。

この施設は、修復時だけに作られるものですし、まさに修復「現場」そのものです。だからこそ、この時期しか体験できない間近にみる修理作業が観光資源になるとかんがえたのでした。そのことで、同時に、技術の再確認と継承や修復の意味も伝えようという試みです。

天空の白鷺の入場者は、2011年3月の公開より累計で、10月・30万人、2012年2・50万人、3月・60万人、11月・100万人と成果を上げています。もちろん、通常期（修復をしていない時期）には及びませんが、修復とその時期の観光資源としての活用というジレンマを上手く解決する試みとして着目されています。

こういった現場公開の試みは、他にも見られます。日光・輪王寺三仏堂の場合、天空回廊（見学通路）として、2011年4月29日より10年間だけの新名所というアピールがされています。

<まとめ>

問題解決の手がかりをさぐるには、ときに「発想の転換」が必要です。今回の例のように、従来、修復をすれば公開できない時期ができてしまうという常識を、あえて、修復自体を観光資源として活用しようという視点の転換が問題を解決するためにひつようとなることがあります。そのためには、大局的な視野の重要性や長期的な展望も踏まえ、柔軟な思考が大切になるのです。

・大森先生のお話は、実際の修復時の写真を示しながら、これらが十分観光資源として魅力的であること、そして、これを観光資源にすることで改めて気がつくその施設の魅力もあるなど、非常にわかりやすく面白い話でした。